

長良川河口堰 30 年シンポジウムの開催趣旨(案)

1. 気候変動・人口減少・少子高齢化により、生態系、防災、利水に大きな変化が起きている

- 雨は川を通じて海へ流れ、そして、水蒸気になって陸に戻ってきます。近年、気候変動によって海が変化し、それが線状降水帯等の気象災害の変化をもたらしています。生態系は、陸域だけでなく、河川、海も大きな変化をしています。
- さらに、人口減少・少子高齢化の人口構造変化や産業構造の変化は、災害対策や利水の在り方に大きな変化を及ぼしています。
- これらを踏まえて、内閣官房は「流域総合水管理」という政策概念を提唱しています。

2. 対話により、「専門知」を集め、さらに「総合知」を創り出すことが大切

- 民主主義は、異なる意見、多様な考え、価値観があることを認め合い、尊重し、それぞれが自由に意見表明し、対話することから始まります。
- 長良川の生態系、利水、治水を検討する専門家の委員会としては、「愛知県長良川河口堰最適運用委員会」だけでなく、岐阜県の「長良川河口堰調査検討会」、水資源機構の「長良川河口堰の更なる弾力的な運用に関するモニタリング部会」、国土交通省の「木曾川水系流域委員会」があります。
- これらの委員会は長良川の生態系、利水、治水を検討するという共通項があります。他方で、河口堰上流の水域の回復・創出、海の生態系の回復に関するアプローチの違いがあります。
- 長良川河口堰の運用開始から 30 年が経過し、(1)で述べたように自然的・社会的条件が大きく変化しています。

それぞれの委員会の差異を強調して「分断」を深めるのではなく、異なる意見、多様な考え、価値観があることを認め合い、共通点に着目して、それぞれの委員会で蓄積されてきた「専門知」を持ち寄り、対話により「総合知」を深めていくことに重点をおくことが大切です。

3. 流域総合水管理、(※さらに「世界流域遺産」という「夢」へ)

- シンポジウムでは、「流域総合水管理」の概念を明確にしていきます。さらに、長良川の上流域から中流域が「世界農業遺産」(FAO)であることを踏まえ、下流域、海までの全域を対象として、「世界流域遺産」(仮称※)のような価値を高めていく議論につなげることをテーマとします。
- よって、本シンポジウムでは、「河口堰の開門」にこだわらず、それぞれの委員会での知見ではなく、個々人の専門家としての知見を持ち寄って、議論を深めたいと考えています。

(※現在、「世界流域遺産」という制度はありません。森・川・海という河川流域と人々の暮らし・生業・幸せとの関わりで、過去から現在へと引き継がれ、そして私たちが未来の世代に引き継いでいくべきかけがえのない私たちの共有物とでもいう概念と、一応、考えることができます。)

